

## なぜ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか？ ——質的研究における仮説構成とデータ分析の生成継承的サイクル

やまだようこ Yoko Yamada

京都大学大学院教育学研究科 Graduate School of Education, Kyoto University

### 要約

本論の目的は、やまだ（2001a）、西條（2002）の研究を生成継承的に発展させ、生死の境界において天気が語られるのはなぜか、その心理的<sup>アクチュアリティ</sup>現実をより深く追求することにある。第2の目的は、実際に行った仮説構成とデータ分析の循環サイクルを、質的研究の方法論として一般化して議論することである。対話的研究プロセスの実践を可視化することで「質的心理学研究」を新しい研究表現の場として創る試みをする。

まず研究の生成継承性および事例の組織的選択について議論した。次に、研究を精緻化する方向に事例を組織的に追加して、同一作者の縦断的な変化プロセスを「死の接近」「生死の境界」「死後」の3時期に分けて分析した。生死のぎりぎりの境界の語りは、死の前後の時期とは明確に区別され、明るい天空・天気への言及は日常から非日常の時空間への突然の転調を示すのではないかと考えられた。最後に、3つのテキストの「生死の境界」を中心にした時期別事例をまとめて修正仮説を提示し、仮説生成と検証の発展のしかたのモデル化を行った。

**キーワード** 生死、語り、ライフストーリー、質的方法、<sup>ジェネラリティ</sup>生成継承性

### Title

**Why people mention the brightness of the sky and weather at the critical boundary of life and death: The generative cycle of hypothesizing and analyzing data in qualitative research.**

### Abstract

The first purpose of this study was to examine why people mention the bright sky and/or fine weather at the critical boundary of life and death of themselves and significant persons. Narratives at three stages of dying: 1) confronting death, 2) the critical boundary (just before and after death), and 3) after death, were systematically analyzed to refine preceding studies (Yamada, 2001a; Saijo 2002). As a result, the narratives at the critical boundary represented a psychological spatial-temporal gap in daily life, and they were clearly different from narratives at the other two stages, which included sensitive feelings for life in nature. The second purpose was to discuss the method of selection of representative cases, and the methodology of generative succession of hypothesizing and analyzing data in qualitative research.

### Key words

life and death, narrative, life story, qualitative method, generativity

## 1 研究の生成継承性および事例選択と仮説提示の方法

### 1 研究の生成継承性

現場からモデル構成していくことをめざす現場心理学の方法（やまだ 1986）は、新たな発見やオリジナルな発想をもつ研究を育てていくことを目的としている。その際の大きな問題は、新たな興味深い発見やオリジナリティの高い発想の芽が生まれたとき、それを単なる思いつきの域を越えてどのようにして「研究」「学問」のレベルにのせていくかということである。

日本の研究は特に欧米の研究の後追いが多かったので、自前の発見をどのようにして「学問」にしていくかという議論は十分になされてこなかった。その意味で最近、種々の領域で現場研究にかかわる方法論の議論がなされるようになったことは意義が大きい（箕浦 1999, 下山 2000, やまだ 1997, やまだ・サトウ・南 2001 など）。

日本の研究では特に先行研究からの継承性が弱く散発的であり、先行研究が 10 年もたつと忘れられ、用語を少し変え意匠を少し変えたものがまた新しいものであるかのように出てくる。このような研究のありかたは、大同小異の建て売り住宅が壁の色や玄関ドアなど細部をほんの少し隣の家と違うデザインにして競っている風景に似ている。みんなが自分の小さな畑を耕しみんなが初めの一步を試みて大同小異の小さな収穫物を得るような現場研究は奨励されるべきではない。これは個性や独創性のはきちがえである。

先行研究をきちんとふまえて、どこまで何がわかっているか、何が論じられてきたかを明確にしたうえで、何が自己の新たな知見としてその領域の学のフィールドに積み上げられるのか、自己の研究の位置と目的を明らかにするべきである。学問の発展にとって本当に必要なのは、先行世代の研究をしっかり引き継ぎながら新たな生成をしていく生成継承性（generativity）をもつ研究をしていくことであろう。

生成継承性とは、世代（generation）と生みだす

（generate）をかけあわせた Erikson, E.H.（1950, 1965）の造語で、新たなものを生みだし、生みだしたものを世代を越えて継承しケアし育てていく力をさしている。Erikson の理論でジェネラティヴィティは、成人期における停滞と対立する発達概念として提起された。Erikson は成人期を、親世代と子世代の cog wheeling stage（はめば歯車段階）という卓越した比喻で、生成と再生のシステムとして説明している。

ジェネラティヴィティは、従来、生殖性、生産性、世代性、世代継承性などと日本語訳されてきたが、私は生成継承性と訳している。それはこの概念が、Erikson が考えた以上に一般化可能な機能を持ち、「生成」と「継承」という矛盾した機能を併せもつことにおいて重要と考えるからである（やまだ 2001c など）。また、アイデンティティが個人中心の概念であるのに対して、生成継承性は、個人を超え、より長い時間軸のうえでの世代間のダイナミックな関係構築にかかわる概念なので、アイデンティティ以上に重要な概念だと考えられる（MacAdams & de St. Aubin 1998, Kotre 1999 など）。この概念は、一方で生産性や創造性と、もう一方で社会や文化のなかで次世代や将来世代を育てていくケアや教育とむすびつので、単に成人期の発達課題という個人心理の領域だけではなく、より一般的な社会的概念として発展させるべきである（Yamada 2002）。

研究の生成継承性という観点からみると、やまだ（2001a）論文を基に「仮説継承型ライフストーリー研究」を論じた西條（2002）論文は、先行研究が提出した仮説を継承して自己の研究の新たな展開への試みが自覚的になされていること、また、自己の方法論を質的研究の方法論として一般化していくための提案と議論がなされていることにおいて高く評価できる。また、実際に私は西條論文に啓発されて、次々に疑問が生まれ、新たなデータ収集活動へと促された。研究の生成継承性において重要なことは、単に前のものをコピーして同じものを再生産することではなく、それを受け継ぎながら新たなものが創造的に生みだされていく生成的活動の連鎖や循環がおこることである。そこで本論文では、西條論文を引き継いでさらに生成継承的に発展させることを試みたい。

## 2 対話的な生成継承の「場」を

私は、日本の研究に独創性が少ないという見方はあたっておらず、本当に足りないのは、独創的な芽を評価したり批判しながら、長期にわたって発展させたり育てていく土壌がないことではないかと考えてきた(やまだ 1995)。直感的なひらめきをもつ発想が生まれたり、現場で興味深い現象を見つけたとき、それを散発的なものとして放置し孤立させないで、公共の場で議論し対話し、意識的に練り上げて学問として発展させていく場が必要である。そこで「質的心理学研究」を対話的な生成継承の場にしていくために、本論では次の3点を試みる。

- 1) 「生死の境界と天気の話」という同じテーマを追った3つの研究の継承と生成の対話的プロセスを、公共の場で具体的に可視化していくこと。
- 2) 自己の研究実践を一事例として、方法論を議論したりモデル化することによって、特定のテーマを超えて「質的心理学研究」に資する一般化を試みること。
- 3) 「質的心理学研究」を、「対話的共同生成の場」「生成継承のはぐくみの土壌」として耕していくための研究をアクティヴに実践すること。

## 3 研究の拡張と収束

西條の研究では、自己の研究の方法論が明確に自覚され、記述されていることが注目される。そこでは具体的な研究テーマに即しておりながら、特殊な個々のテーマを越える一般化が行われており、質的研究方法論に貢献している。特に事例のとりあげ方が自覚的であり、次のような方法が提案されている。

- 1) 新テキストによる事例の追加と仮説検証
- 2) 修正仮説の提示
- 3) 修正仮説による先行テキスト事例の検討

西條の事例でも、やまだ(2001a)の仮説が検証された。ただし、彼の事例ではやまだがとりあげた「生

死のぎりぎりの境界」よりもさらに広い時期を含んでおり、修正仮説もやまだの言及した「天気」から「天気・自然・季節」に拡張された。西條が幅広い文脈で発展的に事例を集めたことは研究の第2ステップとして評価できる。しかし、修正仮説が「天気・自然・季節」にまで拡張されると、おりおりの心理的感慨を自然にたくして詠う伝統をもつ日本の詩歌の大部分がそのなかに含まれてしまい議論が拡散していく怖れがある。

新テキストを導入して対象事例を追加・拡張する作業は不可欠だが、それによって「生死のぎりぎりの境界で、なぜ突然の転調のように文脈が変わって妙に明るい天気と言及されるのか？」という本来の疑問が拡散しない方向を考えたい。本論でも新テキストを導入するが、問題追及に向かって対象事例の選択を組織的に行っていききたい。また本論では、いかようにも適用可能であるが、積極的に肯定も否定もできない仮説ではなく、限定された領域で、限定された目的に対して、限定された用語で構成される検証可能な仮説(やまだ 1986; 1997)をめざして、仮説をより細分化・精緻化し具体的に検証可能な方向へと研究を第3ステップへすすめる。そして、「生死のぎりぎりの境界」に特定できる語りの核となる中心的な特徴は何かということを確認にしたい。

## 4 事例の組織的分析

研究を第3ステップに具体的にすすめる前に、方法論にかかわる問題を議論しておきたい。まず議論するのは「事例の組織的分析」に関してである。

仮説検証のために事例選択をするときには、「事例選択の恣意性」「事例の個人差」の問題を考えておく必要があるだろう。前者の問題としては、仮説に適合する都合のよい事例ばかりを恣意的に選択し、仮説に合致しない事例を無視しているのではないかという批判に答える必要がある。後者の問題としては、ある種の語り方には特有の傾向があるのではないか、死にかかわらず天気や空に言及するタイプの人がいるし、そうでない人もいだろうから、個人的な語り方の特徴を選択しているだけではないかという批判に応える必要がある。

図1は、本研究でとった「事例選択の組織化」のしかたの模式図である。散発的で恣意的な事例選択とは異なっていることがわかるだろう。本研究では、上記の2つの事例選択にかかわる問題に対応するために、事例を次のような手順で組織的に選択して考察する。

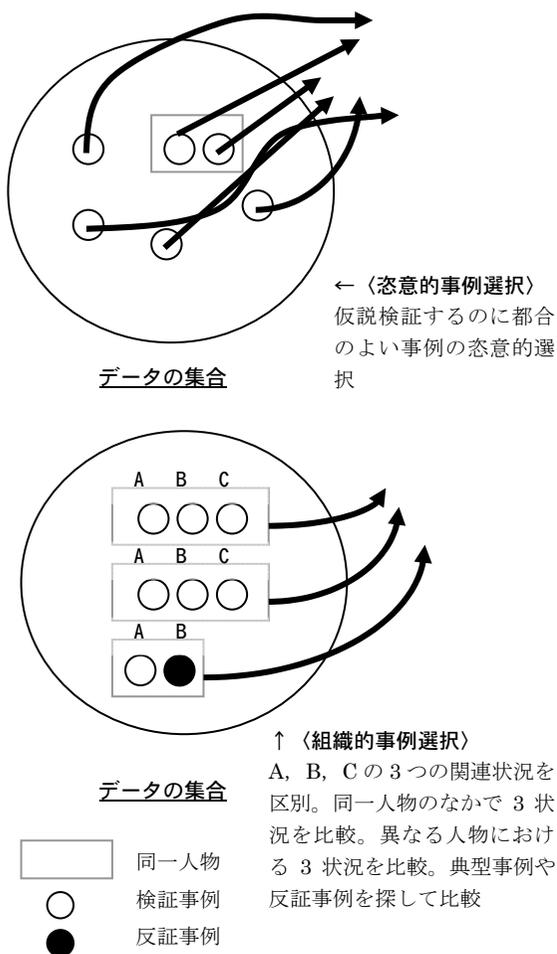


図1 仮説検証 修正のための質的データ事例の組織的選択方法モデル

まず第1, 第2のステップで、同一人の語りテキストから異なる時期の事例を組織的に選ぶ。具体的には、第1に、齋藤茂吉「赤光」の「死にたまふ母」連作其の1~4を重点的にとりあげて、「死にゆくプロセス」の進行と語りとの相互関係をみる。第2には、同じ作者が他の文脈で歌った「死」にかかわる歌を組織的にとりあげて比較する。

第3には、上記の分析で得られた「生死の境界」の心理的<sup>アクチュアリティ</sup>現<sup>実</sup>の特徴を考察するのに役立つと考えられる他者の事例を補足追加して、齋藤茂吉個人の特徴を超える一般性について考察する。第4には、先行研究と合わせて3つのテキストの事例を統合し再検討することによって、「なぜ？」という疑問への考察をより明確にする。

第1, 第2のステップで、同一人の語りテキストから異なる時期の事例を組織的に選ぶことを考えたのは、1) 同一人の語りを縦断的に比較することによって、「生死の境界」時期の核となる語りの特徴を、他の時期の語りとの対比的関連性から、より明確にできると考えたからである。また、2) 語り手の「個性」や表現のくせによって「天気」に言及されるのではないかという疑問にも応えられる。同じ語り手においても、死のプロセスの微妙な時期のズレによって、異なる表現がされているならば、そこには独特の心理的<sup>アクチュアリティ</sup>現<sup>実</sup>が含まれている可能性が高く、なぜその語りになるのかという深い考察ができる。さらに3) 連続した時間軸をもつ分析によって、散発的、恣意的に都合のよい事例ばかりを選ぶことを防ぐことができる。

現場性が高い資料では、めったにおこらない事象の資料を数多く手に入れることには大きな制約がある。しかし事例の選択においては、恣意的に都合のよいものだけをあげたり偶然性に頼ってはいは、十分な検証はできない。現場データにおいて事例を集めるのは膨大な労力を要するので、理論的に多少不備のあるもの、現実<sup>に</sup>手に入りやすいもの、制約のあるものを使わざるをえない。事例収集に制約があるのはやむをえないが、質的研究の場合には数量的分析とは異なり、典型性・代表性をカバーする事例収集が必要だろう(やまだ1986)。

数量的分析では、多くの事例を集めて、数量的に「天気」に言及した例とそうでない例の割合を数量的

に示すことになるが、質的分析ではそれでは必ずしも十分な検証はできないと考えられる。もちろん目的しだいではあるが、この研究のように「天気」に言及する人が一般的にどの程度出現するかという統計的分布の調査が目的ではない場合には特に数量は問題ではない。数が多ければ心理的現実の真実をより反映しているとか、信頼性が高いとは必ずしもいえないからである。大衆的な語りデータであるほど類似したモチーフが頻繁に語られるし、似た語りや模倣した語りが頻繁に現れる。テレビの視聴率の高さが番組の内容の水準を保証しないように、数の多さは多くの人に普及している証拠にはなっても、質的考察の基準にはならない。たとえ珍しい事例で出現頻度としては稀であっても、そこに重要な心理的現実が含まれているとすれば、データとしての価値が高い。したがって数の多さよりも、質のうえで典型性・代表性 (representative) をもつ語り事例を選ぶことが必要である。

質的研究、特にライフストーリーやナラティブ研究においては、フィクションを含めて、あらゆるテキストを事例として採用できる (やまだ 2000)。しかし、それゆえに、テーマや問題としている内容を明確にするための事例の集め方は組織的にする必要がある。また、なぜその事例を選んだのかの理由を明確に記述していく必要があるだろう。本論で中心的にとりあげる斎藤茂吉の代表作「赤光」や、中原中也や宮沢賢治の詩は、きわだって個性的な芸術家の独創的な表現であるが、長い時間をかけて多くの人々に愛唱されてきた日本の詩歌の代表的な古典であり、そこには個人的な感慨を超えるある種の普遍性をもつ心理的現実が反映されているとみなすことができる。また詩歌の解釈を補足する多種の研究の蓄積があり、一次資料を含めた伝記的資料が豊富であることも選択の理由にあげられる。

## 5 研究者の視点や解釈をどれだけ語り分析や仮説に入れるか？

西條は、やまだの分析が「テキスト外部」の視点から考察されていることに対して、「研究者も部分的に語りのなかに入り込み、語り手の視点に立ちつつ分析する」ことの重要性を指摘した。そして、「当人は

(1) どのような心理状況で、(2) 何を、(3) どのように感じ取ったために、そういった言及がされたか分析・考察する」必要性をあげている。このような西條の考えは、分析後の修正仮説にも次のように反映されている。修正仮説①『『うつくしい・あかるい・晴れやかな』生のエネルギーを感じさせる』修正仮説②『感受性が高まり、死とは対照的な『自然現象の……』を敏感に感じ取り』などの表現である。

以上のような西條の提案には、語り分析一般にかかわる本質的な問題を含むので広範な議論が必要である。しかし、ここでは論点を当面の問題にしぼり、少なくとも以下3点について大きな問題をはらむと考えられるので、それに対する私の見解を述べる。

### 1) 研究者が単に外側からの分析に終わらず、語り手の心理の内側に入り込んで推測を含んだ心理状況を分析すること。

私もまた、分析の途上において、外側からの形式的な分析に終わらず、語り手の心情に深く入り込んで、そこにどのような心理的アクチュアリティが生起しているかを推測を含めて考察することはたいへん重要だと考える。

しかし、そこで起きていると推測される心理的アクチュアリティを研究者として「言語化」「記述」「モデル化」「仮説」にするときには、感情移入や解釈による用語を極力排して、できるだけ外部的、形式的、公共的、操作的に検証できるように、平明で誤解の少ない記述方法にしていくことが必要ではないかと考えている。

### 2) 語り手の内側に入り込んだ分析を、同じ記述言語で表現することによる、トートロジーや検証再現困難性。

研究者が語り手の心情に踏み込んで解釈することは、考察を深くするからおおいに奨励されてよい。しかし、その考察を同じ内部者の視点、つまり語り手の心情による言語で記述すると、トートロジーに陥り、外部から定義したり第三者による検証は難しくなる。

たとえば、「感受性の高まり」や「敏感に感じ取った」かどうかはどのようにしたら証明できるのだろうか。「感受性が高まった」言動から「感受性の高ま

り」を推測するのでは、同語反復のトートロジーになり、説明したことになる。

再現性 (replication) は科学の基本であり、たとえ一事例であっても、同じ手続きをとれば再現できることが保証されねばならない。必要ならば同種の証拠で検証できるように客観的な用語で記述する必要があると私は考える。したがって、分析途中では、研究者の解釈や語り手の心情の推測を行っても、分析結果や仮説については、客観的に事実関係を規定できる用語で記述し、その推測が妥当であることを証明できる外部の証拠を出していくことが必要ではないだろうか。したがって、研究者による内部者の視点を含む心理過程の推測 (「生のエネルギーを感じさせる」「感受性の高まり」など) は、仮説や結果の記述とは区別したほうがいいのではないかと私は考える。

### 3) 一つの仮説のなかに「事実」と「解釈」「考察」を混合して入れたり、複数の意味を含んだ長い仮説を提示する問題。

西條の仮説には、上記に述べた研究者の解釈も含まれているので、その解釈を含めて正否が問われることになる。つまり「死とは対照的な」「敏感に感じ取り」など、なぜ生死の境界で天気の語りが現れるかの考察や解釈が仮説のなかに含まれている。この仮説では、「……の条件下で……が現れる」事実を検証するのか、「……であると考えられる」ことを検証するのかあいまいになる。もし考察についても仮説が必要であるならば、それは別個に提起すべきだろう。また複数の仮定が一つの仮説のなかに含まれると、完全な合否が出しにくいので、仮説はできる限り単純明瞭にすべきだと考えられる。

## II 「生死の境界」を中心に関連時期を区別した語りの組織的分析。

### 6 同一の語り手による、親しい他者の「死」のプロセスと「語り」の関連

本研究では、齋藤茂吉の「赤光」を中心事例として

選んだ。それは第1には、同一の語り手が親しい他者が死にゆくときの自己の心情の刻々の変化を生き生きと言語化しており、現場性のある「語り」資料として優れていると考えられたからである。第2には、日本の代表的歌人の鋭い感受性がとらえた連作は、長期にわたって多くの人々の感動と共感をよぶものですでに古典の位置をしめており、評価も公共性も高い。したがって、この歌のなかにある「心理的現実」の分析は、個人の体験の範囲を越える典型的事例の一つになると考えられたからである。

テキスト 3-1 は、齋藤茂吉の「赤光」から、母の死のプロセスを A「死の接近」B「生死の境界」C「死後」の3時期に分けて、その時期によって語りの内容や使われることばの微妙な相違を比較対照して明確にするために整理したものである。

なお以後では、やまだ (2001a) で扱った事例の集合をそれぞれテキスト 1、西條のものをテキスト 2、本研究をテキスト 3 と呼び、それぞれの研究の各事例番号はテキスト番号のあとにつけることにした。

#### A 死の接近

テキスト 3-1 の A「死の接近——死にゆく母」の事例では、3-1～3-3 を見るとわかるように、母の死が切迫しているときには、〈蛙の声を聞く〉〈桑の香がただよふ〉〈花が咲く〉などが歌われていた。

これらの歌では、自然の生き物の声や香りや姿が歌われている。死の接近によって、死と対照される生命に敏感になって、自然が聴覚的、臭覚的、視覚的に切実に身に迫って感じられ、自然の生き物の声や香りや姿がしみじみと身にしみていとおしく感じられたと考えられる。これらの事例でも、「天」「夜明け」など B の時期で中核となる「天」ということばが現れた。しかし、天は「蛙の声」によって地と媒介され、夜明けは「蚕 (蛾の幼虫で人間が飼育する)」が食べる「桑の香」によって媒介されていた。いずれの歌でも死の接近によって、対照的に生命がしみじみと強調されるという構造をもっている。

#### B 生死の境界

B「生死の境界——母の死の直後」になると、事例 3-4～3-7 のように〈天〉〈空〉〈星〉〈朝日〉〈火〉など

のことばが中心となった。この段階では、緊迫にみちた転調がみられた。それまで歌われていた自然の生命、みずみずしい自然の生き物の声や姿は失せてしまった。他の生き物を媒介にしないで、天空と自己が直接じかに対峙するような緊張みなぎる歌になったことが大きな特徴である。

また天空のなかでも、夜の暗さや闇は強調されなかった。悲しさや寂しさや不安などの心情も歌われていない。突然の空白のような無機質の世界、心情や感情のない宇宙的空間が現れている。しかしその世界は暗くはなく、夜であるにもかかわらず、「ひ（火や日）」による「赤光」の明るさが強調されていた。

### C 死後

C「死後——母の死後の喪失感と追憶」になると、再び〈鳥が啼く〉〈自然の菜を食う〉〈花を植える〉など、生き物のいる自然の情景が多く歌われた。またこの段階では、死が接近した時期とも異なり、自然の風物とともに〈かなし〉〈なやみ〉など死後の喪失の悲しみや感情のほとぼりや感傷がもっとも多く表現されたことが特徴である。死後の喪失感や追憶などの感情が自然の情景にたくして歌われたと考えられる。

以上のように「死の接近」「生死の境界」「死後」の3時期を区別すると、「生死のぎりぎりの境界」でとりわけ「明るい天空」に言及されていることがわかる。これは、今までの2研究と共通しており、やまだ(2001a)の仮説を検証しさらに補強するデータといえよう。

これらの事例からさらに、「天気」は単なる天候の意味に限らないのではないかと考えられた。

天気は、一つには「天」や「空」など人間が生きる地上の世界を越える「天空」という宇宙的なヴィジョンとかかわるのではないかと考えられた。天空(sky)は、「この世とあの世のイメージ」モデルでは、地面(ground)と対立する概念であり、この世の人間や他の生き物が住むことができない世界「あの世」の表象である(やまだ 2001b; やまだ 2002 モデルII, III参照)。

もう一つには天気、それも雨や曇や嵐ではなく晴れた明るい天気への言及は、「赤光」という詩歌集の

題が端的に示しているように、ある種の「明るい光」「あかあかとした光」への言及と関連するのではないかと考えられた。

今まで考察してきた「天気」ということばは、「天空・天気」ということばにしたほうがより明確になると考えられる。その「天空・天気」の性質は、今までの研究もふまえて「明るい」ということばで代表させる。そして「明るい天空・天気」と修正したい。

「明るい天空」がなぜ言及されるのか、その心理的現実は何かについての考察は、本事例の検討でより深まり、さらに明確になった。それが言及されるのは、以前に考察した「死と対照的に自然のエネルギーや生命への自覚が高まるから」という意味よりも、もっと異なる意味のほうが強そうである。

生死の境界では、日常世界と非日常世界に大きな亀裂が生じる。その裂け目で見たり感じられるのは、人間や動植物のいのちが育まれる地上の風景ではなく、もっと無機質の世界、「ひ」(日・火)が輝いているだけの世界なのかもしれない。悲しい、寂しいなどの感情表現がなく、突然の転調のように「天」や「空」が語られること、しかもその「天空」は暗くなく明るいことが共通しているのである。生死の境界で言及される「あかるさ」は、感情の入り込まないあつけらかんとした空白でもあり、日常世界からの突然にふつうの人間の感情を超える非日常世界への転調をも示しているのではないだろうか。「あかるい」は、あける(明ける、空ける、開ける)、あけぼの、あか(赤、朱)とも意味を共有している。「あか」は、古代より聖なる色とされ、呪術や信仰とむすびついてきた。

以上のような「天空」の表現は、「光」への言及が多くみられる臨死体験事例と共通している(ベッカー 1992, 立花 1994)。また、キリスト教における「天国」の表象との関連も考えられる。天国は伝統的に、明るくまばゆい「光」と、生死のない永遠の世界が特徴だと表象されてきた(Collen & Banhard 1984)。天国では永遠の生命を得るといわれるが、それは自然の季節の移ろいや、いのちの推移など変化する時間が感じられない、時間が止まった世界である。生死のぎりぎりの境界では、臨死体験や天国の表象と類似した体験、あかるい光が見えて、いのちのない日常次元とは異なる次元、エポックのような止まった時間を体験するの

ではないだろうか。

### テキスト 3-1 同一の語り手による、親しい人の「死」のプロセスと「語り」との関連

事例 3-1～3-11 死のプロセスを A, B, C 3 時期に分けたときの歌の用語の相違  
齋藤茂吉「赤光」における「死にたまふ母」連作より 1913 年作

#### A 「死の接近——死にゆく母」

##### 死にたまふ母 其の 2 より

〈蛙の声を聞く〉〈桑の香がただよふ〉〈花が咲く〉など、死と対照される生命、自然の生き物の声や香りや姿がしみじみと身にしみていとおしく感じられる歌。

事例 3-1 死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる

事例 3-2 桑の香の青くただよふ朝明けに堪えがたければ母呼びにけり

事例 3-3 死に近き母が目に寄りをだまきの花咲きたりといひにけるかな

齋藤茂吉 赤光

#### B 「生死の境界——母の死の直後」

##### 死にたまふ母 其の 3 より

〈天〉〈空〉〈星〉〈朝日〉〈火〉など、みずみずしい自然の生き物の声や姿は失せて転調し、生き物を媒介にしないで天空と直接対峙するような緊張がみなぎる歌。夜の暗さや悲しい心情は歌われず、「赤光」の明るさが強調されている。

事例 3-4 わが母を焼かねばならぬ火を持てり天つ空には見るものもなし

事例 3-5 星のみる夜ぞらのもとに赤赤とははその母は燃えゆきにけり

事例 3-6 はふり火を守りこよひは更けにけり今夜の天のいつくしきかも

事例 3-7 灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろえり

齋藤茂吉 赤光

#### C 「死後——母の死後の喪失感と追憶」

##### 死にたまふ母 其の 4、墓前より

〈鳥が啼く〉〈かなし〉〈自然の菜を食う〉〈花を植える〉など、死後の喪失の悲しみと追憶を自然にたくして歌う。

事例 3-8 山かげに雉子が啼きたり山かげの酔つばき湯こそかなしかりけれ

事例 3-9 湯どころに二夜ねぶりに蓴菜を食へさらさらに悲しみにけり

事例 3-10 山ゆえに笹竹の子を食ひにけりはその母よはその母よ

事例 3-11 ひつそりと心なやみて水かける松葉ぼたんはきのふ植えみにし

齋藤茂吉 赤光

### 7 同一の語り手による他者の「死」のプロセスと「語り」との関連

次にテキスト 3-1 の分析結果をふまえて、同じ作者の別の文脈の事例を追加して、3 時期で同じ結果がみられるか仮説検証をすすめるとともに一般化に向かう作業を行った。同じ齋藤茂吉の「赤光」から死のプロセス 3 時期にかかわる歌を取り出し、テキスト 3-2 のように分析した。そして同じ結果が「母」以外の他者にもみられるか、あるいは相手によって異なるかどうか、微妙な時期の違いも含めてより幅広い文脈で比較した。

#### A 死の接近

テキスト 3-2 のように、A 「死の接近」は A-1, A-2 の 2 種類の場合が考えられた。A-1 は、死が事実として接近しており、死にゆく「親しい他者」を語る場合である。この場合の「親しい他者」は、母など肉親に限らず、事例 3-12, 3-13 のように、病気で寝ている自己と情動的に同一視された小さな虫（こおろぎ）などまで拡張可能である。ただし、「弱々しい亡び」が感傷的に歌われており、死の接近の感じ方は観念的である。

また、この事例にみられるように、齋藤茂吉において「死の接近」と「生き物の鳴声を聞く」行為は、「母」の場合だけではなく、より一般的なむすびつきがみられた。

A-2 は、「死の隣接」というかたちで「死の接近」を感じる場合の例である。これらは A-1 の自己と死者との同一視とは逆に、他者の死にふれて対照的に自己の生命の昂進をより強く感じる場合であろう。その表

現として齋藤茂吉の場合には「実を食う」という生命の根源となる身体行為の表現が特徴的にみられた。

「母」の死後にも、先の事例 3-9, 3-10 のように竹の子などを「食う」ことによって悲しみが増す歌がうたわれていた。他者の「死」と対照される「食う」行為は、自己の「生命」の自覚と深く関連しているだろう。

## B 生死の境界

「生死の境界」にかかわる歌は、事例 3-18, 事例 3-19, 20 が見いだされた。ここでも、「あかあか」「朝焼け」「天」「入日」「あかく」「赤光」が強調されており、今まで考察してきた仮説が支持される。また、これらにおいても自然の動植物、季節の推移、悲しみの感情などは歌われていないことが注目される。

特に師の死をうたった事例 3-18 には、例外的に長い詞がつけられているが、通報を聞いたのが深夜であるのに、暗闇よりも「あかあか」「朝焼け」「天」が緊張感をはらんで強調されていた。

## C 死後

「死後」であげた事例は、友人の死後間もないときの哀悼と追憶の歌である。「死の接近」時期と同様に「虫の声を聞く」など自然の動植物を感受する表現が出ていること、さらに「死の接近」時期とは異なり「なげき」「泣く」「あはれ」など感情や感傷を表す表現が頻発していることが、先に考察した母の事例と共通している。

### テキスト 3-2 同一の語り手による、他者の「死」のプロセスと「語り」との関連

事例 3-12~3-22 死のプロセスを A, B, C 3 時期に分けたときの、母以外の他者の死の場合の歌との比較。

齋藤茂吉「赤光」から

#### A-1 「死の接近——死にゆく虫への共感」

死にゆく（虫の声を聞く）。「ほそほそ」「亡び」「霜冷え」など弱く寂しいイメージで、死にゆく小さい生き物に、病む自己の身を共感的に重ねて歌う。

事例 3-12 神無月の土の小床にほそほそと亡びのうたを蟲鳴きにけり

事例 3-13 よひよひの露冷えまさる遠空をこほろぎの子らは死にて行くらむ

1909 年作 齋藤茂吉 赤光

#### A-2 「死の接近——他者の死と対照して生を自覚」

他者の「死」にふれて対照的に自己の「生」を自覚する歌。

（死に隣接した）戦場の兄と対照して自覚される〈実を食う〉自己のいのち。

事例 3-14 戦場のわが兄より来し錢もちて泣きみたりけり涙が落ちて

事例 3-15 はるばると母は戦を思ひたまふ桑の木の実<sup>み</sup>は熟<sup>み</sup>みたりけり

事例 3-16 けふの日は母の辺にみてくるぐると熟める桑の実<sup>み</sup>にけるかも

1905 年作 齋藤茂吉 赤光

隣室の人の死にかかわらず〈実を食う〉。隣室の死と対照して自覚される自己の生。

事例 3-17 隣室に人は死ねどもひたぶるに帯ぐさの実<sup>み</sup>食<sup>ひ</sup>たかりけり

1909 年作 齋藤茂吉 赤光

#### B 「生死の境界——師の死の直後」

親しい師の死の直後、特別に下記のような詞書きがつけられた歌である。実際に死を知ったのは真夜中であるが、「あかあか」「朝焼け」「東の空」「天」が強調された夜明けの歌がつけられている。

七月三十日信濃上諏訪に滞在し、一湯浴びて寝ようと湯壺に浸ってゐた時、左千夫先生死んだといふ電報を受取った。予は直ちに高木なる島木赤彦宅へ走る。夜は十二時を過ぎてゐた。

事例 3-18 あかあかと朝焼けにけりひんがしの山<sup>やま</sup>の天朝焼けにけり

1913 年作 齋藤茂吉 赤光

「葬り火」連作。作者（精神科医）の患者で自殺した狂者の死の直後、「入日あかく」「目眩」「道」「野」が歌われている。

事例 3-19 自殺せし狂者の棺のうしろより目眩し<sup>めまい</sup>て行ける道<sup>みち</sup>に入日あかく

事例 3-20 赤光<sup>しやくくわう</sup>のなかに浮びて棺<sup>くわん</sup>ひとつ行き遙<sup>はら</sup>

けかり野は涯<sup>はて</sup>ならん

1912 年作 齋藤茂吉 赤光

### C「死後——友人の死後の喪失感と追憶」

「悼堀内卓」より。友人の死後に追憶する歌。「深き夜」「なげき」「霜」「蟲」「あはれ」「泣き」などが歌われている。

事例 3-21 深き夜のとづるまなこにおもかげに見え  
くる友をなげきわたるも

事例 3-22 霜ちかき蟲のあはれを君と居て泣きつつ  
聞かむと思ひたりしか

1910 年作 齋藤茂吉 赤光

## 8 「生死の境界」の語りの追加事例——「自己の死」「この世ならぬ風景」の例

テキスト 3-1、テキスト 3-2 において齋藤茂吉の事例を縦断的に 3 時期に分けて検討した結果、「生死のぎりぎり境界」の語りの特徴がより明確になったと考えられる。そこで次の作業として、他の語り手による別の文脈の事例を追加し、「生死のぎりぎりの境界」でおこっている心理的現実への考察をさらにすすめた。テキスト 3-3 は、他者の死ではなく「自己の死」にかかわる例と、今までの考察をさらに深めるための「この世ならぬ風景」の例である。

事例 3-23 は、医師である作者が癌再発の診断を受けた直後の体験を記したものである。「不思議な光景」「明るい」「輝く」「尊く見える」などのことばによって、スーパーの買い物客や子どもや犬など、アパートの駐車場からの見慣れた日常の風景が、突然、不思議な非日常的な世界へと転換した様子が描かれている。

事例 3-24 は、西條の事例 1-6 の省略部分を追加した事例である。この詩が本当に死に際に書かれたのかどうか伝記研究者のあいだでは異論があるようだが、死の境界に近い経験がもとになっていることは確かであろう。医師の側から見た「自己」（血をはいているさんさんとした景色）と、自分が見ている「きれいな青空」「すきとおった風」が対照されている。そして医者から見える世界（日常世界）と死者の世界（この世ならぬ世界）の対比が鮮やかに描かれている。

このような事例を追加することによって、生死のぎ

りぎりの境界に「明るい天空」が見える体験は、先行研究で仮定したように、死者を見送る場合にも、自己の死の場合にもおこることが、さらに検証された。また、それは日常生活が突然に非日常世界へ転換するような不思議な体験、この世ならぬ体験のようである。この体験は、臨死体験の報告と非常に近い。「光が見える」、「あかるく不安がない」などが臨死体験と共通する。また、「浄土」「極楽」「天国」などと呼ばれてきた明るい光がさしている清らかな世界とも共通性がある。

事例 3-25、3-26 は、厳密には死の直後に書かれた詩ではなく数か月たっているが、賢治にとって死者の妹は幼いときから作者の分身のように親しかったので、その死への関与はきわめて深い。妹の死の前後につくられた賢治の一連の詩歌は、死と直面した心理状態の記述として心理学者にとっても貴重な一次資料であろう。ここでとりあげたのは「この世ならぬ風景」の特徴がよく言語化されている事例である。

事例 3-25 では、妹の死の行方を追って北の端へ慟哭の旅をする作者に、突然の転調のように、日常世界から遮断された不思議な世界が現れたことがアクチュアリティをもって描かれている。ギルちゃんという意味不明の名前の少女の眼はあいているのだが「ぼくたちのことは見えない」、鳥がばあつと飛んでいっても驚かないで「黙っている」。そこは、コミュニケーションが不可能な透明な壁でへだてられたような世界、いのちの躍動感を感じられない静の世界、しかし暗闇ではなく、お日さまがある青くすきとった空の世界のようである。

事例 3-26 は、より観念的ではあるが、葬送行進曲の響く死にゆく風景、「光」にみちた「天」ののぞく、心から遠い死の世界をかいま見た様子が書かれている。その風景が「鳥もわたらない清澄な空間」という生き物のいない世界と記述されていることは注目すべきであろう。

以上のような世界は、やまだ・加藤（1998）、やまだ（2001b）の日仏研究でイメージ画に描かれた「あの世」の表象と大きな共通性がある。事例 3-25 のギルちゃんは、イメージ画で描かれた「あの世の人」、たとえば、同じ人間の姿をしているのだが「瞳のない（empty eyes）顔」をもち、この世からは見えない透

明人間のような図像と似ている。また、この世とあの世のイメージ画でも「あかるい天空」が多々現れた。宗教画によくある地獄など暗い世界や地底のイメージはほとんど見られず、やまだ(2001b)の結果では、日本で50.7%、フランスで30.6%の人々があの世の位置を「天空」においていた。また、あの世は日仏ともに、雲の上の明るい世界として描かれることが圧倒的に多かった。

テキスト 3-3 B「生死の境界」を考察するための追加事例——「自己の死」の例と「この世ならぬ風景」の例

**事例 3-23 「自己の死」、この世ならぬ風景」の例**

語り手(自己)「不思議な光景」「明るい」「輝く」「尊く見える」

癌の転移で死が間近に迫ったとき、見慣れた日常の風景が、不思議な非日常的な世界へと転換。

癌の肺への転移を知った時、覚悟はしていたものの、私の背中は一瞬凍りました。その転移巣はひとつやふたつでないのです。レントゲン室を出るとき、私は決心していました。歩けるところまで歩いていこう。

その日の夕暮れ、アパートの駐車場に車を置きながら、私は不思議な光景を見ていました。世の中がとっても明るいのです。スーパーへ来る買物客が輝いて見える。走りまわる子供たちが輝いて見える。犬が、垂れはじめた稲穂が、雑草が、電柱が、小石までが輝いて見えるのです。アパートへ戻ってみた妻もまた、手をあわせたいほどに尊く見えました。

井村和清 32歳医師遺稿集

『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』祥伝社

**事例 3-24 「自己の死」(事例 1-6 の省略部分の追加)「この世ならぬ風景」の例**

語り手(自己)「きれいな青空」「すきとおった風」

医者から見た死にかけた患者としての世界(日常生活)と死に瀕した自己の側から見た世界(この世ならぬ世界)の対比。

あなたは医学会のお帰りか何かは知りませんが  
黒いフロックコートを召して  
こんなに本気にいろいろ手あてもしていただければ  
これで死んでもまづは文句もありません  
血がでてあるにかゝらず  
こんなにのんきで苦しくないのは

魂魄なかばからだをはなれたのですかな  
たゞどうも血のために  
それを云えないのがひどいです  
あなたの方からみたらずるぶんさんさんたるけし  
きでせうが  
わたくしから見えるのは  
やっぱりきれいな青ぞらと  
すきとおった風ばかりです

宮沢賢治 作年月不詳  
眼にて云う 『宮沢賢治全集Ⅱ』

**「この世ならぬ風景」の特徴を考察するための追加参考事例**

**事例 3-25**

最愛の妹の死後。厳密には死の直後ではなく数か月後につくられた詩である。日常生活と時空の断絶した、生き生きした生き物のいない、コミュニケーションできない、しかし明るく澄んだ天空の「この世ならぬ風景」へと転調した心理状態をよく表していると考えられる参考例。

あいつはこんなさびしい停車場を  
たったひとりで通っていつたろうか  
どこへ行くとわからないその方向を  
どの種類の世界へはひるともしれないそのみちを  
たったひとりでさびしくあるいて行つたらう  
か……

((ギルちゃんまつさをになつてすわってみたよ))

((こおんなにして眼は大きくあいていたけど  
ぼくたちのことはまるでみえないようだったよ))……

((ギルちゃん青くてすきとほるやうだったよ))

((鳥がね たくさんたねまきのときのやうに  
ばあつと空を通つたの

でもギルちゃんだまつていたよ))

((お日さまあんまり変に飽いるだつたわねえ))

宮沢賢治 1923.8.1  
オフォーツク挽歌 『宮沢賢治全集Ⅰ』

**事例 3-26**

あやしい光の微塵にみちた  
幻惑の天がのぞき  
またそのなかにはかやきまばゆい積雲の一行が  
こころも遠くならんでいる  
これら葬送行進曲の層雲の底

鳥もわたらない<sup>せいとう</sup>清澄な空間を

宮沢賢治 1923.8.31

雲とはんのか 『宮沢賢治全集Ⅰ』

.....  
**A「死の接近」とB「生死の境界」を比較する追加事例——Bにおいて親密な人の死の直後「天空」が語られない例。ただし「この世ならぬ風景」への突然の転調は語られる。**

**事例 3-27 A「死の接近——死にゆく息子」**

語り手〈父〉「曇り空」「櫛の大木」「緑の葉の繁る枝」「樹木の見える病室」

真夏日数えるほどしかない冷夏がいぜんとして続いていて、この日も曇り空の、気温のあまり上がらないすっきりしない天気だった。窓の外を見やると、五十メートルほど先にそびえる一本の櫛の大木が、濃い緑の葉の繁る枝を窓の視界いっぱいに広げていた。その雄渾な樹木は洋二郎を見守ってくれているように見えた。

それまで窓の外の景色をゆっくりと眺めるだけの心のゆとりがなかったことに、私は気づいた。《樹木の見える病室で、洋二郎にはよかったな》と思った。

柳田邦男 1995

『犠牲——わが息子・脳死の11日』文藝春秋

**事例 3-28 B「生死の境界——息子の死の直後」**

語り手〈父〉。「天空」については語られていないが、「偶然」「なんとということ」「目に見えない大きなもの」「神」「祈る」などのことばに示されるように、自宅の居間に帰ると、偶然に神への祈りの音楽が響き、見慣れた日常世界が突然に非日常世界に転換したことが語られている。

二つの腎臓の摘出がすんで、洋二郎の遺体をわが家に連れて帰ったのは、午後十一時すぎだった。

居間に安置して、グラスに水を注いで供えたとき、賢一郎がテレビのスイッチを入れた。偶然にも、NHKの衛星放送でタルコフスキーの映画『サクリファイス』が放映されているのに気づいたのだった。映画はいままさに終わろうとするところだった。

なんとことだろう。あの『マタイ受難曲』のARIA「憐れみ給え、わが神よ」のむせび泣くような旋律が部屋いっぱい流れた。私は立ちすくんだ。洋二郎は神に祈ったことはなかった。頑ななま

でに祈らなかった。私も目に見えない大きなもの、すべてを超越したものとしての神の存在への畏怖の念を抱きつつも、全身全霊を投げ出して祈るという行為をしたことがなかった。だが、このとき私は、神が洋二郎に憐れみをかけ給うてほしいと心底から祈る気持ちになった。どういう神なのかと考えることもせずに。ARIAの旋律はいつまでもいつまでも私の胸に響き続けた。

柳田邦男 1995

『犠牲——わが息子・脳死の11日』文藝春秋

**9 A「死の接近」とB「生死の境界」を比較する追加事例**

テキスト 3-3 の事例 3-27、3-28 は、さらに広い文脈で A「死の接近」と B「生死の境界」を比較する追加事例である。

事例 3-27 A「死の接近——死にゆく息子」では、語り手は「父」である。脳死の息子を看取った 11 日間の体験を書いたノンフィクションのなかに、「樹木」が見える病室が語られている場面がある。

死に瀕したときに病室の窓から樹木が見えることが印象に残る事例は、童話にもあり、日常的にもよく体験するので、探せば他にも多くの事例が見つかるであろう。

ここで焦点化している問題は、死の接近において対照的に生命に敏感になり、樹木など自然の生命の偉大さや季節の推移に心ひかれるという日常的な心理ではなく、「生死のぎりぎりの境界」の心理である。その観点からみたとき、事例 3-27 と同じ語り手が「息子の死の直後」の体験を語った事例 3-28 は注目に値する。

この事例では、「明るい天空・天気」は出てこない。したがって、仮説があてはまらない事例である。しかし、完全な反証事例ではない。日常世界に突然転換がおこって、「神々しい」この世ならぬ世界、非日常世界が現れた体験としては共通しているからである。ここで書かれているのは、「樹木」など日常の生き物に生命力を感じる体験とは次元が違う体験であり、ふだん考えたことがない「神」「祈り」など目に見えないもの、超越したものとの出会いが語られている。このように「明るい天空・天気」が出現しない関連事例を

組織的に集めることも今後は必要であろう。

**III 3 テクストの「生死の境界」を中心とした  
時期別事例のまとめと修正仮説の提示。仮説  
構成と検証の生成継承サイクルのモデル化**

**10 3つのテキストの「生死の境界」事例のまとめ  
と修正仮説**

今までの研究と本研究の結果をまとめて整理する。表1は、やまだ(2001a)、西條(2002)と本論文の3つのテキストに現れた「生死のぎりぎりの境界」の語り事例を、誰の死か、作者(語り手)とテキストの種類、「天気・天空」にかかわることばを整理してまとめたものである。事例3-28を除いて、「明るい天気・天空」にかかわることばが語られていることがわかった。そこで、仮説を次のように修正して明確化したい。

**B 生死の境界**

**〈修正仮説〉**

親しい他者の死、自己の死にかかわらず、生死のぎりぎりの境界で、明るい天空や天気の語りが現れることがある。

修正仮説の基にあると考えられる心理は、次のようではないかと推定される。

**〈想定される心理〉**

- 1) 日常から非日常の時空間への突然の転調や亀裂  
(cf. 連続して推移する日常の時間感覚と対照的)
- 2) 自己が天空や日とじかに対峙する「この世ならぬ世界」の出現。  
(cf. 地上の生き物や生命と共感するこの世の世界と対照的)
- 3) あっけらかんとした明るさや澄みきった緊張感。  
(cf. 悲しい、寂しいなどのしみじみした人間的感情の不在)

**11 「死の接近」「死後」事例のまとめと新たな関連仮説の構成**

本研究では「生死の境界」の考察を主題としたが、それを核として関連する2時期が区別された。「死の接近」と「死後」である。「生死の境界」は日常の時空間に突然裂け目がひらけたような生死の感情や自然の生き物が生息しない独特のあっけらかんとした非日常的風景と考えられた。しかし、関連する2時期はより日常的に感じられる「生死」の感慨に近いものである。これらの組織的事例収集や検証、さらなる考察はこれからの課題であるが、新たな関連仮説が想定された。

**A 死の接近**

表2は2つのテキストにおける「死の接近」事例のまとめと、そこから新たに想定された関連する仮説2である。

**〈関連仮説①〉**

親しい他者や自己の死に接近すると、対照的に他の生き物とのつながりや自然の生命力が語られるのではないか。

**〈想定される心理状態〉**

- 1) 死と対照される生や生命力の自覚
- 2) 人間のいのちと自然の生き物のいのちの共感性の高まり
- 3) いとおしさ、愛らしさ、大切、切なさ、寂しさ、哀れなど、しみじみと生者の身にしみる感情

**C 死後**

表3は、2つのテキストの「死後」時期における事例のまとめと、新たに提示された関連仮説3である。

**〈関連仮説②〉**

親しい他者の死後は、追憶による喪失感や時間の推移が語られるのではないか。

**〈想定される心理〉**

- 1) 過去や死者の想起や追憶。
- 2) 喪失感の自覚や再確認
- 3) 悲しみ、なげき、寂しさなど感情の深まりや変化
- 4) 自然の生命の移ろいや季節の巡りなど、経過、推移、循環の時間感覚

表1 3つのテキストの「生死の境界」事例のまとめと修正仮説

B「生死の境界」における語り事例\*

事例番号	誰の死か	作者とテキスト	天空・天気にかかわることば
------	------	---------	---------------

テキスト1 やまだ (2001a)

事例 1-1	妻	東京物語 (映画)	きれいな夜明け, 暑くなる
事例 1-2	心の恋人	インタビュー	良いお天気, 青空
事例 1-3	自己	語り記録	日の光, 明るくきれい
事例 1-4	弟	中原中也の詩	良いお天気
事例 1-5	弟	中原中也の詩	良いお天気, 日射し, あったか, すがすがしく

テキスト2 西條 (2002)

事例 2-1	自己	山頭火の日記	晴れ
事例 2-5	妹	宮澤賢治の詩	みぞれ, あかるい
事例 2-6	自己	宮澤賢治の詩	きれいな青空, すきとおった風 (事例 3-24)
事例 2-7	自己	宮澤賢治の絶筆	そらはれわたる
事例 2-8	自己	手塚 治の漫画	夕日, 美しく光る

テキスト3 やまだ (本研究) 〈 〉は参考事例

事例 3-4	母	齋籐茂吉の短歌	天つ空
事例 3-5	母	齋籐茂吉の短歌	星のいる夜空, 赤赤,
事例 3-6	母	齋籐茂吉の短歌	天のいつくしき
事例 3-7	母	齋籐茂吉の短歌	朝日
事例 3-18	師	齋籐茂吉の短歌	あかあか, 朝焼け, ひんがし, 天
事例 3-19	狂者(患者)	齋籐茂吉の短歌	入日, あかく
事例 3-20	狂者(患者)	齋籐茂吉の短歌	赤光
事例 3-23	自己	癌死の医師の遺稿	明るい, 輝く
〈事例 3-25	妹	宮沢賢治の詩	まっさお, すきとおる, お日さま)
〈事例 3-26	妹	宮沢賢治の詩	光, 天, かがやき, 清澄な空間)
〈事例 3-28	息子	柳田邦男のノンフィクション	目にみえないもの, 超越, 神)

修正仮説

親しい他者の死, 自己の死にかかわらず, 生死のぎりぎりの境界 (死の直前か直後) で, 明るい天空や天気の語りが現れることがある。

想定される心理

- 1 日常から非日常の時空間への突然の転調や亀裂  
(cf. 連続して推移する日常の時間感覚と対照的)
- 2 自己が天空や日とじかに対峙する「この世ならぬ世界」の出現  
(cf. 地上の生き物や生命と共感するこの世の世界と対照的)
- 3 あっけらかんとした明るさや澄みきった緊張感  
(cf. 悲しい, 寂しいなどのしみじみした人間的感情の不在)

\* (注) 西條は自己の研究を事例1, 山田の研究を事例2にしたが, 表1, 2, 3では事例番号をテキスト1, 2, 3の順にそろえたので注意されたい。

表2 3つのテキストの「死の接近」事例のまとめと関連仮説

A「死の接近」における、「自然の生き物」の語り事例\*

事例番号	誰の死か	作者とテキスト	自然にかかわることば
------	------	---------	------------

テキスト2 西條 (2002)

事例2-2	自己 (自殺未遂の後)	山頭火の俳句と日記	虫を聴いている
-------	-------------	-----------	---------

テキスト3 やまだ (本研究)

事例3-1	母	齋藤茂吉の短歌	蛙の声を聴いている
事例3-2	母	齋藤茂吉の短歌	桑の香, 青くただよ
事例3-3	母	齋藤茂吉の短歌	おだまきの花咲く
事例3-12	こおろぎ	齋藤茂吉の短歌	虫鳴く
事例3-13	こおろぎ	齋藤茂吉の短歌	虫が死ぬ
事例3-15	兄 (戦場)	齋藤茂吉の短歌	木の実は熟み
事例3-16	兄 (戦場)	齋藤茂吉の短歌	実食み
事例3-17	隣室の人	齋藤茂吉の短歌	実食いたい
事例3-27	息子	柳田邦男のノンフィクション	病室から見る櫛の大木

関連仮説①

親しい他者や自己の死に接近すると、対照的に他の生き物とのつながりや自然の生命力が語られるのではないか。

想定される心理

- 1 死と対照される生や生命力の自覚
- 2 人間のいのちと自然の生き物のいのちの共感性の高まり
- 3 いとおしさ, 愛らしさ, 大切, 切なさ, 寂しさ, 哀れなど, しみじみと生者の身にしみる感情

\* (注) 西條は自己の研究を事例1, 山田の研究を事例2にしたが, 表1, 2, 3では事例番号をテキスト1, 2, 3の順にそろえたので注意されたい。

表3 3つのテキストの「死後」事例のまとめと関連仮説

C「死後の喪失と追憶」における、「自然や季節」の語り事例\*

事例番号	誰の死か	作者とテキスト	自然にかかわることば
------	------	---------	------------

テキスト2 西條（2002） おもに追憶——季節の巡りによって喪失と不在が実感される

事例 2-4	自殺した友人	山田詠美の小説	春が来た、巡ってくる
事例 2-9	子ども	中原中也の詩	また来ん春
事例 2-10	弟	中原中也の詩	雨が降る、今年の梅雨にはいない

テキスト3 やまだ（本研究） おもに喪失——自然の生命が悲しみを呼び起こす

事例 3-8	母	齋藤茂吉の短歌	雉子が啼く（悲しい）
事例 3-9	母	齋藤茂吉の短歌	菜を食う（悲しみ）
事例 3-10	母	齋藤茂吉の短歌	笹竹を食う（母よ）
事例 3-11	母	齋藤茂吉の短歌	松葉ぼたんを植える
事例 3-21	友	齋藤茂吉の短歌	深き夜（なげき）
事例 3-22	友	齋藤茂吉の短歌	霜、虫（あはれ、泣きつつ聞く）

関連仮説②

親しい他者の死後は、追憶による喪失感や時間の推移が語られるのではないか。

想定される心理

- 1 過去や死者の想起や追憶
- 2 喪失感の自覚や再確認
- 3 悲しみ、なげき、寂しさなど感情の深まりや変化
- 4 自然の生命の移ろいや季節の巡りなど、経過、推移、循環の時間感覚

\*（注）西條は自己の研究を事例1、山田の研究を事例2にしたが、表1,2,3では事例番号をテキスト1,2,3の順にそろえたので注意されたい。

## 12 3つの研究をもとにした仮説構成とデータ分析の循環、研究の生成継承サイクルのモデル

図2は、3つの研究の関連のなかで本研究を位置づけながら、仮説構成の生成継承サイクルのプロセスをまとめたモデルである。

図2に示したように、やまだ(2001a)が提起した事例と仮説をもとに、西條(2002)は一部の事例を重ねあわせながら仮説検証とより幅広い事例の集積と拡大した修正仮説の提案を行った。本研究では、西條の仮説や事例と一部重ねあわせながら、精緻化する方向で組織的に事例を提示した。そして、中核となる「生死の境界」部分を他の時期と関連させながら、より狭くしぼりこみ、修正仮説を提出した。この修正仮説は、最初の仮説と基本的には同じであるが、より限定的になり、より明確化したものになった。さらに2つの関連時期や関連仮説の提出を加えたことで、心理プロセスの考察も含めてより深い考察ができたと考えられる。

仮説構成と検証過程は循環的に深化・発展する。西條は第2ステップとしてやまだの仮説の範囲を発展的に拡大する作業をしたが、第3ステップでは狭めて精緻化する作業を試みた結果、3つの時期が語りのうえでもそこに推定される心理状態においても区別されると考えられた、以上のような研究の生成継承プロセスを図2から見てとることができよう。

以上のように本研究では、同じテーマを追ったやまだ→西條→やまだの3つの具体的な研究をもとに生成継承的な発展のしかたの一事例をモデル化した。これは一つの試みにすぎないが、このように個々のテーマに即して具体的に研究実践をしながら、より一般的な研究の方法論を記述していくことが質的心理学の発展に重要だと考えられる。また、このように対話しながら生成継承的に研究を発展させることによって、「質的心理学研究」の方法論が鍛えられるとともに蓄積されていくであろう。

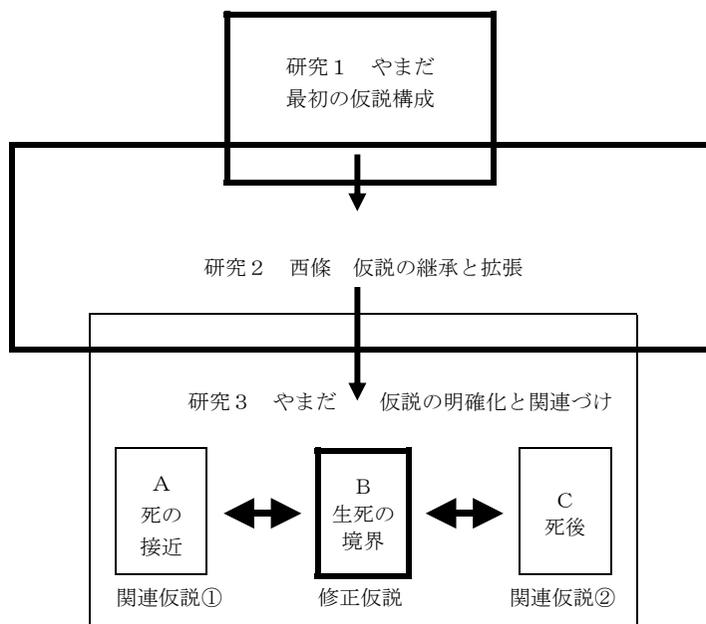


図2 3つの研究における仮説構成の生成継承的プロセスのモデル化

本論文の研究は、研究代表者（山田洋子）の平成 13 年度基盤研究 B（2）「人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築」（課題番号 13410081）の援助を受けた。

## 引用文献

- ベッカー, カール 1992 死の体験 法蔵館
- Collen, M. & Banhard, L. 1984 *Heaven: a history* Yale University Press. 大熊昭信訳 1993 天国の歴史 大修館書店
- Erikson, E.H. 1950 *Childhood and society*. W.W. Norton. 仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 1,2 みすず書房
- Erikson, E.H. 1965 *Insight and responsibility*. W.W. Norton. 鎌 幹八郎 1971 洞察と責任 誠信書房
- 井村和清 1980 飛鳥へ, そしてまだ見ぬ子へ 祥伝社
- Kotre, J. 1999 *Make it count: how to generate a legacy that gives meaning to your life*. The free Press.
- MacAdams, D.P. & de St. Aubin, E. (Eds.) 1998 *Generativity and adult development: how and why we care for the next generation*. American Psychological Association.
- 箕浦康子 1999 フィールドワークの技法と実際 ミネルヴァ書房
- 宮沢賢治 1986 宮沢賢治全集 1,2 ちくま書房
- 立花 隆 1994 臨死体験 上下 文芸春秋
- 西條剛央 2002 生死の境界と「天気・自然・季節」の語り——「仮説継承型ライフストーリー研究」のモデル提示 質的心理学研究 1 新曜社 55-69.
- 齋藤茂吉 1913 赤光 東雲堂 (1980 新選名著復刻全集 近代文学館 ほるぷ出版)
- 下山晴彦 2000 心理臨床の発想と実践 岩波書店
- やまだようこ 1986 モデル構成をめざす現場心理学の方法論 愛知淑徳短期大学紀要 31-51. (やまだようこ編 1997 現場心理学の発想 新曜社 161-185.)
- やまだようこ 1995 理論研究をまとめるために 発達心理学研究 6, 72-74.
- やまだようこ (編) 1997 現場心理学の発想 新曜社
- やまだようこ 2000 人生を物語ることの意味——ライフストーリーの心理学 やまだようこ (編) 人生を物語る ミネルヴァ書房 1-38.
- やまだようこ 2001a いのちと人生の物語——生死の境界と天気の語り やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編) 2001 カタログ現場心理学——表現の冒険 金子書房 4-11.
- やまだようこ (代表者) 2001b 現代日仏青年の他界観の生涯発達心理学的研究 平成 10-12 年度科学研究費研究成果報告書
- やまだようこ 2001c エリクソンの子どもたちと生成継承性——もう一人の子どもニールと、親としてのエリクソン 藤田英典他編 教育学年報 8 子ども問題 世織書房 25-48.
- やまだようこ 2002 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス——「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に 質的心理学研究 1, 新曜社 107-128.
- Yamada, Y. 2002 Models of life-span developmental psychology: a construction of the generative life cycle model including the concept of "death" 京都大学教育学研究科紀要 48.
- やまだようこ・加藤藤信 1998 イメージ画にみる他界の表象——この世とあの世の位置関係 京都大学教育学部紀要 44, 86-111.
- やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編) 2001 カタログ現場心理学——表現の冒険 金子書房
- 柳田邦男 1995 犠牲——わが息子・脳死の 11 日 文芸春秋

(2001.7.2 受稿, 2001.9.27 受理)